

# 滝畑フォレストアーツ2012

## —地域資源を活かしたアーツエデュケーションの開発と実践—

谷 悟

### はじめに

大阪府の南に位置する河内長野市は、豊かな自然と歴史遺産に恵まれた魅力溢れるまちである。とりわけ、滝畑地区は美しい森林、湖、滝や古刹など風光明媚な土地として、いにしえより暮らしを営んできた村落が形成されている。

また、1967年より滝畑ダムの着工がはじまり、1981年の竣工時には、村の一部が水没したという悲哀の記憶が満ちている地区でもある。しかしその後、キャンプ場や遊歩道が完備されたことにより、ナチュラルツーリズム的なスポットとなった。鮮やかな緑に囲まれつつ、鳥の囀りに耳を傾け、アウトドアを楽しみ、澄んだ空気、水辺のせせらぎ、滝から発せられるマイナスイオンに癒されたい人々が、最上のアメニティ空間を堪能しようと訪れている。

1999年には、「滝畑アートウォーキング」<sup>(1)</sup>が開催され、国際的に活躍するアーティストたちが滞在し、作品の制作、展示をおこなったアーティスト・イン・レジデンス事業として注目された。近年では、河内長野市を中心とした自然豊かな山麓エリアを「奥河内」と称し、地域特性を活用した様々な観光イベント<sup>(2)</sup>を実施している。

「滝畑フォレストアーツ2012」は、河内長野市立滝畑ふるさと文化財の森センター<sup>(3)</sup>を拠点に、2012年8月23日～24日(1泊2日)で催されたアーツエデュケーションプロジェクトである。河内長野市内に住む小学生、大阪芸術大学の学生、関係者をはじめ、地域住民、市役所、NPOスタッフら約100名が集い、地域資源を活かしたアートワークで交流しつつ、各々の空想力や創造力を鍛えることを目的としたプログラムをメインに展開した。

本事業は、河内長野市の依頼に対し、大阪芸術大学芸術計画学科アートプランニング研究室が受託し、私が総合ディレクターを務めた。企画制作は、大阪芸術大学の複数にまたがる学科の学生、卒業生、教員で構成された大阪芸術大学滝畑フォレストアーツコミッティ<sup>(4)</sup>が担当した。主催は、河内長野市、河内長野市教育委員会、大阪芸術大学。協力は、大阪府森林組合、滝畑レイクパーク、滝畑自治会、おおさか河内材活用研究会 アドプトフォレスト天見、河内長野森林ボランティア [トモロス]、NPO法人SEIN、河内長野市青少年リーダー会であり、それぞれの分野からお力添えをいただく運営体制で臨んだ。

本稿は、その活動内容をドキュメントするのみならず、アーツエデュケーションプログラムの開発と実践という視座からそれが果たした役割や可能性について考察を深めることを目的とする。

## 2. コンセプト

滝畑フォレストアーツを有意義なアーツエデュケーションプロジェクトにするために基本構想を検討した。以下に5つのコンセプトを簡潔にまとめることとする。

### a. 豊かな自然のなかで、地域資源を活かしたアートワークを展開し、滝畑の再発見につとめる

滝畑を散策し、自ら手に入れた様々な材料と奥河内の間伐材をふんだんに用いたアートワークで、滝畑の再発見につとめ

る。また、このエリアで採録した音を活かした楽曲で、サウンドアーツのコンサートを催し、アンサンブル、パフォーマンスなどのコラボレーションを試み、フォレストアーツの可能性を模索する。

#### b. 子どもたちの感性を揺さぶり、人間力を育むアーツエデュケーションに着手

滝畑に五感で接し、不思議、驚き、感動を見つけ出す。それをふまえた上で、空想力を発揮させ、独創性に富んだクリエイションを展開させる。自発性や協調性等の人間力を育みながらも、多様な表現を生み出す芸術の力を体感することで、図画工作、音楽からの解放、拡張を促すことも試みる。

#### c. 多領域のアートメディアを横断させた大阪芸術大学ならではのプログラム

総合芸術大学ならではの特性を活かし、複数の学科から学生、卒業生、教員によるプロジェクトチームを組成。造形、建築、音響、言語、身体の各メディアを融合、駆使したオリジナリティ溢れるワークショップをディレクションする。

#### d. 行政、大学、協同組合、NPO、地域住民が協働、相互触発される産官学民連携事業

河内長野を愛で、誇りに想う将来世代を育むために、地域の力を結集させた体制を整備する。次代を担う子どもたちと行政、大学、協同組合、NPO、地域住民が協働、相互触発される産官学民連携事業をプロデュースする。

#### e. 奥河内をステージに、魅力的な教育・文化事業を催し、河内長野市のブランドカラーを構築・発信

奥河内をステージに、芸術と教育の交感を展開させる「滝畑フォレストアーツ2012」で、教育立市宣言の内容をより深めることを企てるとともに、文化振興計画を魅力的に具現化させる事例となることを目指す。これにより、ハイレベルな教育・文化政策を有する市のブランド力を発信させる。

### 3. アーツエデュケーションプログラムの流れ

滝畑フォレストアーツで展開したアーツエデュケーションのメインプログラムは、滝畑に棲息する“森と湖の精”、“架空の生き物”の創作である。この取り組みは、自分の中に潜み、蠢くものと滝畑の自然から感じられる気配を融合させることで、ひとつの命を生み出す源泉をさぐる行為である。それは、独自の視点に気付き、極めたいという想いを培養することで、自分の核を見つめようとする「濃密な時」を体感するものである。以下に時系列に沿って、各段階のポイントを記すことにしたい。

#### 0. ガイダンス

プログラムの流れを説明するとともに、滝畑の自然、歴史をふまえるために、地域住民と学芸員をゲストに迎え、レクチャーを実施した。子どもたちに、この地が抱える問題や展望をさぐる問題意識を芽生えさせることを促した。ただ単に、キャラクターを創造するのではなく、その物語にどうポジショニングさせるのか、世界観の模索も試みる大切さを説いた。

#### 1. 滝畑をフィールドワークする

滝畑に五感で接することで、自分が何に反応しているのか、絵やことばで記録した。また、滝畑がもたらす不思議、驚き、感動を見つけ出し、観測することに力を注いだ。



図1 レクチャー(滝畑地区住民の谷脩三氏による場の記憶)



図2 フィールドワーク／ダムを見学



図3 “森と湖の精”／粘土造形の指導

## 2. 滝畑の地域資源をコレクションする

滝畑を散策し、自分が気になる落ち葉、種子、枝、蔓、石、虫の死骸などを探し、持ち帰り、“自然の恵み”を創作の素材にすることを企てた。

## 3.“森と湖の精”や“架空の生き物”の設定を考案

現地を歩いた感触を手掛かりに、子どもならではの豊かな空想力を働かせ、“森と湖の精”をイメージし、設定（名前、生態、性格、特技、トレードマーク、リアルヴォイス、マイホームほか）を練り上げた。

## 4.“森と湖の精”や“架空の生き物”の姿を具現化

### ①ラフスケッチ

自らで考案した設定をもとに、ラフスケッチを多数、描くことで、イメージの連鎖を生じさせ、体型、コスチューム、グッズ、象徴的な表情、ポーズのあり方を絞り込み、確かな像を紡ぎだした。

## 5.“森と湖の精”や“架空の生き物”の姿を具現化

### ②造形表現

木粉粘土で、体軀を制作し、現地で集めたモノたちの活かし方に創意工夫を凝らすことで、いのちを吹き込み、リアルに輝かせる技芸に挑んだ。

## 6.“森と湖の精”や“架空の生き物”たちの家（いすながや）の制作

すばらしい滝畑の風景を愛する“森と湖の精”や“架空の生き物”たちが活力を漲らせ、愉しく暮らせる家を創った。間伐材を切断し、磨き、造形的アプローチで加工を進めるとともに、森と湖の精と環境との関係をも視野に入れた空間デザインをプログラミングすることも考えた。

## 7. プレゼンテーション用原稿の作成

プレゼンテーション時に必要となるキャラクターの紹介用原稿を作成した。自分の想いを他者に伝えるための言語表現力を鍛え、駆使した。



図4 いすながやの制作

## 8. 全員のいすながやで滝畑村を再現

古地図や写真を手掛かりにして、できる限り厳密に、ダムに水没してしまった滝畑村を再現した。

当時の滝畑に居住していた人々の助言により、調整が成された。かつて、この地にどのようなかたちで集落が形成されていたのか、不可視なものを可視化させるこの地の記憶と向き合う貴重な時間を創出した。



図5 いすながやによる滝畑村の再現

## 9. “森と湖の精”や“架空の生き物”たちの家を建てる場を見つける

自分の手で生み出したキャラクターが住まうにふさわしい場を見つけ出すために、滝畑レイクパークの環境を詳細に観察した。自然に恵まれた環境の魅力に眼差しを注ぎつつ、“森と湖の精”や“架空の生き物”の生態にふさわしい場をチョイスした。いすながやを単独のみならず、縦や横に連結させることで、マンションや長屋をかたちづくり、つながりを可視化させる事例もあった。

## 10. “森と湖の精”や“架空の生き物”たちを家にナビゲートする

“森と湖の精”の特性に応じたあり方を十分に反映させたかたちで、いすながやに“森と湖の精”や“架空の生き物”たちを誘い、展示した。ただ作品を置くのではなく、いのちを意識した設置の手法にこだわり、力を注いだ者も少なくはなかった。



図6 いすながやに展示した作品

## 11. プレゼンテーション及び作品鑑賞+交流会

自分の空想力で誕生させたキャラクターの名前や特性について、全員の前で明解に説明した。また、オーディエンスは他者の作品を鑑賞し、多様な表現のあり方を味わった。各々がコミュニケーションを交わし、相互触発を生じさせる機会にもなったようだ。

## 12. 次代を担う子どもたちと“森と湖の精”たちのセレモニーを催す

奥河内に、“滝畑フォレストアーツ共和国”が誕生したことを皆で祝福し、かわちながのウォーターで乾杯した。また、レッスンを受けた子どもたちが演じる親善大使が滝畑フォレストアーツ共和国建国宣言<sup>(5)</sup>をおこない、自然と人間が共生し、平和で楽しいふるさとにすることを宣誓した。その後、グループリーダーの署名が入った修了証を子どもたち、ひとりひとりに手渡し、最後のコミュニケーションを交わすとともに、後日、住民票を送送することを約束した。最後に、全ての参加者、関係者が集い、記念写真を撮影し、クロージング・パーティーの場として機



図7 滝畑フォレストアーツ共和国建国宣言



図8 滝畑フォレストアーツ共和国建国宣言／乾杯

能させた。

### 13. “森と湖の精”たちに滝畑フォレストアーツ共和国の住民票を発行

2012年12月、本企画に参画したアニバーサリー・シートとして、滝畑フォレストアーツ共和国の住民票を発行、授与した。大阪芸術大学滝畑フォレストアーツコミティメンバーによるオリジナルイラスト入りの住民票には、子どもたちが創作した“森と湖の精”や“架空の生き物”に関する基本情報（氏名、性別、誕生日、世帯主、住民コード等）が記載されるとともに作品の写真を貼り、完成させた。子どもたちと大学生が皆で楽しく過ごした8月24日を滝畑フォレストアーツ共和国建国記念日と定



図9 滝畑フォレストアーツ共和国 住民票

め、滝畑を第二のふるさととして想ってもらう証を創った。

### 14. ドキュメンテーション作品(映像集／DVD)を制作、公開

アーツエデュケーションプロジェクトの全過程を撮影、編集した映像集(DVD)を制作した。子どもたちが、滝畑とどのように向き合い、自らの力で如何に創作を進めたのかを主要内容とした。また、このプロジェクトが果たした役割や可能性を伝えるためのドキュメンテーション作品としても機能するようにまとめあげることが大切にしたと考えた。なお、本作品は2013年1月より、本プロジェクトの参加者、保護者及び教育関係者に対し、貸出されるかたちで公開されることとなった。

### 4. 特別プログラム

アーツエデュケーションプログラムとは別に、子どもたちに対し、アートの魅力を伝えるための企画を大阪芸術大学滝畑フォレストアーツコミティのメンバーが取り組んだ。

## ・滝畑サウンドアーツコンサート

滝畑ではかつて、茶道に用いる高級な白炭や花炭がさかんに生産されていた。光滝寺には、炭焼不動堂があるが、毎年、はじめて出来た炭が奉納されたという。滝畑の生業を大切に育んできた民の誇りをアートに反映させたいと考えた。それは、今では生産されていない炭を探すことから始まった。市役所がもつネットワークを手掛かりに、すばらしい炭を保存している方を見つけることができた。炭をお借りして、数多くの炭を棒でたたくことで様々な音階を奏でさせ、コンピュータを用いて、次々とサンプリングする作業をおこなった。硬質の炭は、キーンと言うややシュールな音色を放ち、遙か彼方の滝畑の扉をサウンドで開く試みを企てた。

滝畑の名産であった炭を基調として創られたオリジナル曲<sup>(6)</sup>は、滝畑界隈で採録した滝つぼの音、川のせせらぎ、お寺の鐘の音ほかを加えられ、幻想的な電子音響に仕上げられた。それは、1日目の夕食(バーベキューパーティー)の後に実施した「滝畑フォレストアーツコンサート」で披露された。また、その曲に合わせて踊るコンテンポラリーダンスとのセッションを鑑賞してもらった。小学校で教わる音楽や身体表現(ダンス)とは異なるアートに触れた子どもたちは、当初は戸惑い気味であったが、徐々に関心を示し、不思議な感覚を味わっていたようだ。

また、鑑賞にとどまらず、小学生もコンサートに参加するかたちをとることで一体感を強めることとした。具体的には、大学生の歌声に小学生が少しずつ、重なりはじめ、やがて会場は美しいアンサンブルに包まれた。それに続く、エスノビートを刻む曲に至っては、次第に集中するようになり、全員がいすながやを打楽器に見立て、パーカッションに用いたり、身体を動かしたり、皆でパフォーマンスの世界に誘われていった。

## ・滝畑フォレストアーツ体操

2日目の朝には、このプロジェクトのために創作された「滝畑フォレストアーツ体操」を皆でおこなった。朝のイメージを彷彿とさせる歌詞、メロディー、リズム、テンポを感じさせる曲に、滝畑で迎えた朝の喜び、さわやかさ、これからはじまるすばらしい世界の予感などをコレオグラフで構成し、身体表現作品にまと



図10 滝畑サウンドアーツコンサート(炭を活かした音響作品)



図11 滝畑サウンドアーツコンサート(コンテンポラリーダンス)

め上げた。小学生と大学生は、身振りでコミュニケーションを交わし、ラジオ体操とは異なるアーティステックな朝を体感していた。

それは、旧滝畑小学校体育館でおこなわれたが、空間が醸し出す独特の空気とパフォーマンスがシンクロし、かつて、この小学校で学んだ子どもたちの気配を感じることもとなった。場の記憶を呼び覚ます機会を創出することができたことは、うれしい限りであった。

## 5. まとめにかえて

### ・地域資源を活かした創造性



図12 滝畑フォレストアーツ体操

今回の取り組みは、教室やアトリエで作品を制作し、学校やホール、ギャラリーで展示をおこなう創造表現体験ではないため、地域資源を最大限に活用したサイトスペシフィックなアプローチが導く創造性にこだわることにした。豊かな自然環境を創作の地平に読み換えることで、ここから作品を生み出すイメージを生成させ、構想→制作→展示までを一貫させることに最大の意義を見出したいと考えた。すぐに作品を創るのではなく、地域住民の話をお聞きし、フィールドワークをすることで、この地と対話を重ねることこそが大切であると判断した。その成果をふまえ、妖精の生態を思索し、徐々にカタチを練り上げていく一方、実際に棲息していそうな場所を見つけ出し、リアルな空気を創出させるための展示のあり方を検討することも極めて重要な作業となった。

小学校の授業では、時間的な制約や学校空間の物理的な限界により、どうしても作品を制作することに重きがおかれることがはなはだ多い。展示のあり方を強く意識しないアプローチは、スキルの習得をせざるを得ない教育に偏る大きな原因となるだろう。作品と場の因果関係を意識<sup>(7)</sup>して、展示までを創作として捉える感覚は、作品に深みをもたらすことになるのではないだろうか。今回は、各々がチョイスした場で展示をおこない、プレゼンテーションを実施したが、他者に自分の成果を伝えるだけでなく、自らの力で、作品に命を吹き込む象徴的な行為となったことも印象的であった。何の脈絡もなく、作品を

羅列するだけの展示を排したことで、アートの次元へ連なる回路を体感できたと思われる。

### ・超域的な学びが拓く世界

近代は、合理性と生産性を尊ぶあまり、領域を次々と切断し、セクショナリズムの動向を加速させた。その結果、各ジャンル間は、ますます死角となり、それらの繋がりが不可視なものになることは言うまでもない。子どもの教育もその例にもれず、各教科の学習は平行に進捗されるシステムが組み立てられ、その交点に生じる関係性に関心を示すことは、極めて少ない。それを意識的に補うことを目的とした総合的な学習では、自発的に生きる力を育むために、社会問題や地域の教育資源になり得るソースを探し、様々な教育施設や団体と連携した上で、それらを多角的にアプローチするトレーニング<sup>(8)</sup>に着手することを目指している。しかし、この教科の指導がスタートされて10年以上経過するのに対し、教育現場では、未だ試行錯誤を繰り返し、最良のメソッドを築こうとする段階であるため、なかなか有意義な成果を引き出すことは難しいようだ。そのような状況を鑑みつつ、滝畑フォレストアーツは、これまで子どもたちが学び、培ってきた知識や感性をアートで繋ぎ、統合させる超域的な学びの場を創出させたいと考えた。

今回のメインプログラムは、図画工作及び音楽を発展させたアートを軸に展開したが、妖精のキャラクターを設定したり、ネーミングを考案したりする作業は、まさに物語構築力であり、国語の領域にも繋がるものであると言える。また、現地を散策して、材料に用いるための植物や鉱物等を採集し、その特徴を把握し、棲息箇所を特定するために自然に眼差しを注ぐ観察力は、理科の領域となろう。この地域に住む方からお話をお聞きした上で、場の記憶について理解し、開発がもたらす光と影を認識する力は社会の領域と言える。いすながやの制作は、1本の間伐材から、パーツを切り出し、それを組み立てていく力が必要になるため、算数と家庭の領域となろう。また、滝畑フォレストアーツ体操は、体育の領域であり、ほぼ全ての教科が扱う領域を横断させた取り組みとなった。超域的な学びは、各領域が響き合うことで、思考のプロセスに刺激を与え、

個人の発想力や提案力を高めるとともに、プロジェクト全体のクリエイティビティをも向上させるかたちとなった。

### ・異世代交流がもたらすもの

今回の参加者は、小学校3～6年生と大学1～4回生、即ち、10代、20代が中心となるが、大学卒業生、大学教員、地域住民、NPO、市役所スタッフの参加者を加えると30代、40代、50代、60代、70代の各世代が混ざり、異世代交流を生じさせ、人間力を鍛える機会となった。小学生各学年4～5名及び大学生1名で1班を形成し、生活から創作までを展開させる基礎単位とした。

子どもたちは、小学校では得られないプロに直結するクリエイティブ業界的なアプローチを学び、本格的な制作に臨んだ。大学生は小学生を導きつつも、一方的にスキルを伝授するのではなく、対話を重ねながら、子どもたちに潜む固有の可能性を引き出すように力を尽くした。両者が生活を共にし、ゆるやかに信頼関係を構築することで、徐々に心を開く子どもも現れ、思うままに純度の高い作品を制作している姿があった。そこに現れた気負いのない自由な創造性は、大学生を驚かせ、心を奪う姿も見られた。大学生が単に専門的な知識と技法を小学生に教えるという講座ではなく、相互触発される瞬間が得られたことは、そこに体温が通った異世代交流が基盤にあったからではないかと推察できる。

また、1日目の夜に特別プログラムとして催したコンサートでもその成果は認められ、大学生の演奏やパフォーマンスを鑑賞するだけでなく、小学生と大学生がアンサンブルをおこなった。いすながやを楽器に見立てて、インプロビゼーションにまで発展させた頃には、ほぼ全ての参加者が加わるかたちとなった。あらゆる世代が己を解放し、表現することで、アートコミュニケーションを交わし、盛り上がった。各々の距離感はかなり縮まり、2日目の作業をより円滑に進めることになった。

### ・教育立市宣言と文化振興推進計画の具現化

河内長野市は、2010年3月に教育立市宣言をおこなっており、それに基づき、学校教育だけでなく、生涯学習にも力を入

れている。それは、市のカラーとしてかなり定着していると言える。河内長野市及び同教育委員会が本事業を大阪芸術大学滝畑フォレストアーツコミッティに依頼した目的は複数あると考えられるが、地域を愛し、我がまちの発展に創造性を発揮できる次世代を育む教育を展開させることが最も大きかったように思う。

また、河内長野市では、近年、観光・地域文化施策のシンボルとして、奥河内と言う名称がよく用いられるようになったが、それを告知するポスターやリーフレットには、滝畑をはじめとするスポットでエコロジカルなライフスタイルを愉しむ姿が強調されている。河内長野市としては、キャンペーンとして打ち出すエリアをステージとした独創的な教育を子どもたちに提供したいと考えたのではないかと推察できる。更に、河内長野市は2006年3月に河内長野市文化振興計画をまとめ、河内長野市文化振興計画推進委員会も立ち上げられた。筆者は第2期から第3期にわたり約3年間、委員長を務めたが、その際に、最も大切に考えていた主要テーマのひとつが、河内長野らしい、河内長野だからこそできる文化振興であった。

上記の3つのベクトルの交点に位置づけられた「滝畑フォレストアーツ2012」は、何に挑み、如何なる役割を果たしたのであろうか。河内長野市は、「教育立市」として、「わがまち」ならではの学びの機会を推進するとしているが、本プロジェクトは、まちの資源を最大限に活用したアーツエデュケーションプログラムの開発を目指したものであった。図画工作及び音楽からの拡張を試みることで、そのどちらでもないアートを体感することができる取り組みを実践したいと考えた。学校教育から解放され、《私》と《地域》に向き合い、目覚める機会を創出することは、教育立市宣言の中にある「私たちは、わがまち河内長野の伝統や文化を大切にし、ふるさとや地域を愛する市民となります」を促すことになったのではないだろうか。また、それは多様な教育のあり方が拓く可能性をリアルに示す取り組みであったとともに《教育》、《地域》、《環境》、《アート》を融合し、響かせる文化振興推進計画を具現化させた1つのモデルにもなり得たものと考ええる。

## 6. 問題点の抽出と今後の課題

小学生は、3年生から6年生までが参加したが、プログラムの理解及び最終的な成果物に学年差の問題が生じたことは否めない。学校では、厳密に学年別の指導計画が立案されるが、今回は条件（課題、手法、所要時間）が同じであったために経験値が弱いと言わざるを得ない低学年のクオリティには、どうしてもばらつきが認められた。しかし、各々の力をふんだんに使い、制作を愉しむ姿が印象的であった。また、スキルは、未熟なもの、大胆な見立ての発想を活かすなど従来のアプローチに縛られないユニークな作品に仕上がるケースもあったため、高学年や大学生たちを驚かせていた例もあった。

次に材料については、エコロジカルな素材を用いたかったため木粉粘土を指定したが、完全に成形させるためには、乾かす時間がかかり必要となるため、タイトな工程で制作をしなければならぬ本プログラムには若干、厳しい面もあった。

続いて、プレゼンテーションについては、今回は約1～1分30秒の制限時間内で、妖精の名前、性格と作品及び展示のポイントについて発表してもらった。炎天下において、小学生全員（47名）及びリーダーを務めた大学生（10名）に要する時間を考えるとやむを得ないが、少し短く感じた。概ね、スムーズに進捗したもの、中には、慌ただしい空気の中で落ち着かない者や語り足りない者もいた。質疑応答を交わし、作品の魅力を相互に味わう機会が欲しいと思ったが、真夏の暑さを考えるとこれ以上、時間をかけることは健康管理上、厳しいと言わざるを得なかった。

今回のタイムテーブルを振り返ると、1泊2日は、少々短かったと言える。作業の内容によっては、やや余裕がないと感じた子どももいたことだろう。春、秋の連休を用い、2泊3日でおこなえば、暑さも緩和することから熱中症のリスクも減少し、のびのび、かつ、じっくりと取り組めたように思う。

最後に、本事業を一過性の取り組みと捉えず、滝畑フォレストアーツ共和国の住民票を活用したカミングホームデーを河内長野市立滝畑ふるさと文化財の森センターや河内長野市立文化会館（ラプリーホール）ほかで催し、参加者のネットワー

クをはかった上で、より深い次元を目指し、協働することでその成果を市民に向けて発信できるシステムを構築すれば、このまことに、高度な文化を創造するきっかけになるだろう。また、教育立市宣言を深めた内容も更に進化することができるだろう。確実に、少しずつ、変容をもたらすための未来投資として捉え、継続的に活動できる予算を確保するマネジメント体制の確立が望まれる。

## 謝辞

「滝畑フォレストアーツ2012」のプランニングを手掛けた際に、私の頭をよぎったフレーズは、「ささやかな社会実験」であった。夏休みに子どもたちを滝畑に集め、ただ、絵を描いたり、造形を創ることで課題をこなしたり、キャンプファイヤーで楽しく歌や楽器を演奏するアートキャンプにしたいと強く思った。この地の記憶をふまえ、ここで手に入れた材料を精一杯、活かし、作品としての滝畑フォレストアーツ共和国を皆で創りたいと考えたのだった。

私のコンセプトをできる限り把握した上で、様々な準備作業に力を尽くしてくれた事務局を担当された河内長野市生涯学習部ふるさと文化課課長井上剛一氏（肩書は当時・以下同じ）、同主幹内田厚氏、同主査東畑洋氏には、ほんとうに感謝したい。その作業を監督するのみならず、宿泊までされ、現場の空気を体感しようとされた生涯学習部長尾谷雅彦氏、また、本事業の意義に深い理解を示され、初日の朝の挨拶をはじめ、現地にまで足を運び、暖かく見守り続けた河内長野市教育長和田栄氏には心から謝意を表したい。

その他にも、当日、スタッフとして参加していただいた河内長野市産業振興部産業活性化室長橋本亨氏をはじめとする職員の皆様や機材協力でお世話になった農林課の皆様、宿泊でお世話になった河内長野市立滝畑ふるさと文化財の森センター長の故八百吉孝氏をはじめ、スタッフの皆様、滝畑についてのレクチャーを担当していただいた地域住民である谷脩三氏、河内長野市立滝畑ふるさと文化財の森センター学芸員

の浦秀行氏、また、本事業に大きな関心を寄せ、それを円滑に実施するためのキャンプ運営と各種プログラムの進行を一手に引き受けてくれたNPO法人SEIN事務局長宝楽陸寛氏にも感謝したい。最後に、私が受託したプロジェクトを産官学民連携事業と捉え、主催に、河内長野市、河内長野市教育委員会とともに大阪芸術大学を加えることに理解を賜った(学)塚本学院理事長・大阪芸術大学学長塚本邦彦先生にも謝意を表したい。河内長野の子どもたちと信頼できる学生、卒業生、先生方とともにすばらしい経験をさせていただいたことを今後の仕事に活かし、アートで社会を刷新させる芸術計画の力を模索したいと考える。とりわけ、次代を担う世代に対し、新たな価値観を育む可能性を秘めているアーツエデュケーションプロジェクトについては、より一層、研究を深め、プログラムの開発と実践に力を注ぎたいと思う。

## 註

- (1)「滝畑アートウォーキング」は、河内長野市海外芸術家交流事業として、1998年～2001年まで、開催された。アメリカ人アーティスト、ケン・トン・ホール、ジュディ・ヴォイチック、ジム・コバルビアスや岡野弘幹&天空オーケストラをはじめ、本学美術学科卒業生であるウエダリクオ、同大学院芸術制作科修了生(元美術学科副手)である坪田昌之も参加した。光滝寺庫裏に滞在し、作品制作・展示及びライブ、人力映画館、ワークショップ、シンポジウムを催し、市民との交流をはかった。なお、本事業は、文化庁「アーティスト・イン・レジデンス」支援事業の第1号に採択されたパイオニア的な取り組みであった。報告書(iop都市文化創造研究所編「Takahata art walking 2001」滝畑アートウォーキング実行委員会 2002)が刊行されている。
- (2) 2013年より、河内長野市の主催で「奥河内SEA TO SUMMIT」が開催されている。本事業は、滝畑の雄大な自然と地形を活かし、カヤック、自転車、ハイク(歩き)などの大会や環境シンポジウムを開催。自然×スポーツ×健康をふまえたエコロジカルなライフスタイル及び環境保全や提唱することを目的としている。
- (3) 滝畑ふるさと文化財の森センターは、2010年、旧滝畑小学校跡地を活用した青少年活動センター(研修宿泊施設)及び旧滝畑民俗資料館を統合した施設であり、河内長野市教育委員会が運営をおこなっている。

- (4) 大阪芸術大学滝畑フォレストアーツコミティは、芸術学部芸術計画学科をはじめ、音楽学科、キャラクター学科、舞台芸術学科、初等芸術教育学科、写真学科、放送学科、同大学院芸術研究科建築領域、写真領域及び同通信教育部建築学科、美術学科、デザイン学科、工芸学科の学生、卒業生、教員計33名で構成した。詳細は、制作メンバーを参照のこと。
- (5) 滝畑フォレストアーツ共和国建国宣言として、参加者全員の前で、以下の憲章(テキスト/羽根 博司氏、ディレクション/谷 悟)を数人の滝畑フォレストアーツ共和国親善大使たちが読み上げた。

### 【わたしたちの居場所憲章】

大きな森と湖の中で  
目で見え  
鼻で香り  
耳で聞いて  
口で味わい  
全身で触った感覚が繋がって生まれた小さいのち

いのちといのちが繋がって  
大きな輪になりました

いっしょに居るだけで気持ちのいい場所  
それが私たちの居場所

ここを私たちのふるさとにしましょう

平成24年8月24日

滝畑フォレストアーツ共和国親善大使

- (6) 滝畑サウンドアーツコンサートの楽曲
  1. Takihata Music 作曲 横山泰久(使用音素材/滝、蟬、炭)
  2. 虚偽 作曲 四宮基稀(使用音素材/川、滝、蟬、炭、鐘)
  3. With instinct 作曲 四宮基稀(使用音素材/炭)
 なお、炭については、河内長野市民である村上茂一氏、村上恵勇氏が大切に保管されていた滝畑産の白炭をお借りした。
- (7) 作品と場の因果関係を意識した上で展示する重要性については、最新の学習指導要領の中でも触れられている。「材料や場所などに進んでかかわり、それを基に構成したり、周囲の様子を考えて合わせたりしながら作ること。」(『小学校学習指導要領解説 図画工作編』文部科学省 2008 p62)及び「展示の場所については、掲示板だけでなく、…(中略)…児童が自分の作品に合った展示場所を見付けたり、児童の思いが伝わりやすい展示の仕方を工夫したりする必要がある。」(同 p87)
- (8) 総合的な学習を展開させるために、学校内外の諸施設とネットワーク

をはかり、横断的なアプローチがとれる体制を整えることの必要性が最新の学習指導要領に記されている。「学校図書館の活用、他の学校との連携、公民館、図書館、博物館等の社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携、地域の教材や学習環境の積極的な活用などの工夫を行うこと。」(『小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編』文部科学省 2008 p47)

指標的な事例としては、“芸術家とのふれあいを通じて森を感じよう”というコンセプトを掲げ、神戸市立自然の家で開催された「Nature Art Camp」(2002～2004)があり、PHスタジオ、藤浩志、柳幸典などがユニークなワークショップを担当した。この取り組みは、「総合的な学習の時間」型宿泊体験活動推進事業(とびっきりネイチャー事業)に採択され、神戸市立井吹西小学校、白川小学校、鈴蘭台小学校、東須磨小学校の4年生が参加した。「Nature Art Camp」iop都市文化研究所編 ネイチャーアートキャンプ実行委員会 2012等の報告書が発刊されている。

#### 掲載図版

- ・図1～4、図10～12 撮影／長谷川朋也
- ・図5～8 撮影／田中宏樹
- ・図9 デザイン／岩城風花  
ディレクション／谷 悟

#### 参考

制作メンバー/ 大阪芸術大学滝畑フォレストアーツコミTEE  
(所属・肩書・学年等は当時のもの)

##### ●総合ディレクター

谷 悟(大阪芸術大学芸術学部芸術計画学科准教授)

##### ●専門スタッフ

##### ・身体表現(演技演出)

滝畑フォレストアーツ共和国建国宣言、滝畑フォレスト体操  
パフォーマンス指導

羽根 博司(大阪芸術大学舞台芸術学科卒業生・元同学科副手)

##### ・身体表現(舞踏)

道場 紀依(大阪芸術大学舞台芸術学科舞踏コース卒業生)

##### ・音響表現 滝畑サウンドアーツコンサート 演奏・音響

四宮 基稀(大阪芸術大学音楽学科音楽制作コース4回生)

横山 泰久(大阪芸術大学音楽学科音楽制作コース3回生)

石橋 美希(大阪芸術大学音楽学科音楽制作コース3回生)

##### ・建築表現 いすながや制作指導

新城 昌(大阪芸術大学通信教育部建築学科卒業生)

松本 紋佳(大阪芸術大学通信教育部デザイン学科卒業生)

##### いすながや制作協力

堀川 孟史(大学院芸術研究科芸術文化学専攻(環境建築研究領域)  
博士課程前期学生)

小谷 梨花(大学院芸術研究科芸術文化学専攻(環境建築研究領域)  
博士課程前期学生)

村田 勇二(大阪芸術大学建築学科4回生)

須賀野 有貴(浪速短期大学デザイン美術学科卒業生)

##### ・造形表現

“森と湖の妖精”、“架空の生き物” 造形指導

岩橋 美佳(大阪芸術大学芸術計画学科4回生)

##### ・キャラクター表現

“森と湖の妖精”、“架空の生き物” 設定、デザイン指導

佐々木 勝(大阪芸術大学キャラクター造形学科4回生)

今野 きさら(大阪芸術大学キャラクター造形学科3回生)

北川 采香(大阪芸術大学キャラクター造形学科3回生)

##### ・ドキュメンテーション(写真)

長谷川 朋也(大阪芸術大学大学院芸術研究科芸術制作専攻(写真  
領域)博士前期課程修了生)

田中 宏樹(大阪芸術大学写真学科4回生)

##### ・ドキュメンテーション(映像)

茶谷 良(大阪芸術大学放送学科卒業生)

##### ・広報・デザイン

岩城 風花(大阪芸術大学芸術計画学科4回生)

##### ・運営

澤田 翠(大阪芸術大学芸術計画学科4回生)

##### ●グループリーダー(子どもたちの総合指導、班の運営)

1班:木下 佳奈(大阪芸術大学芸術計画学科4回生)

2班:宮崎 美幸(大阪芸術大学通信教育部美術学科生)

3班:山本 彩奈(大阪芸術大学初等芸術教育学科3回生)

4班:中野 友紀子(大阪芸術大学通信教育部デザイン学科卒業生)

5班:草野 広樹(大阪芸術大学芸術計画学科卒業生)

6班:梶原 麻衣(大阪芸術大学芸術計画学科4回生)

7班:金野 真理(大阪芸術大学初等芸術教育学科3回生)

8班:三好 綾乃(大阪芸術大学初等芸術教育学科3回生)

9班:稲住 拓哉(大阪芸術大学芸術計画学科3回生)

10班:三浦 健太郎(大阪芸術大学芸術計画学科1回生)

##### ●指導教員

##### ・アーツエデュケーション指導監修

末延 國康(大阪芸術大学初等芸術教育学科教授)

“森と湖の精”、“架空の生き物” 設定、デザイン指導監修

林 日出男(大阪芸術大学キャラクター造形学科准教授)

##### ・いすながや制作指導監修

田口 雅一(大阪芸術大学建築学科准教授)